Voice 27

読み聞かせの世界には国境がない

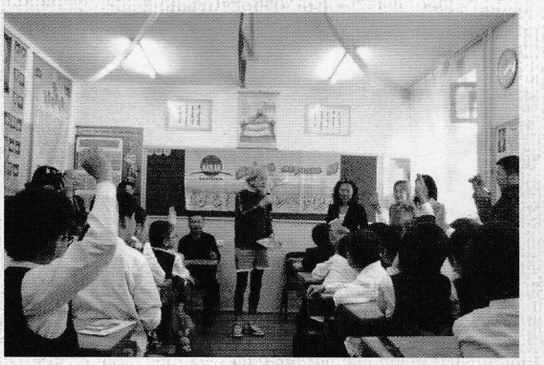
作家・よい子に読み聞かせ隊 隊長
志茂田 景樹

東日本大震災の年の秋、モンゴル外務省が主催してウランバートルで「異文化受容シンポジウム」が開かれました。日蒙双方から7、8人ずつの研究者がそれぞれの専門的立場で異文化の受容をテーマに発表を行いました。

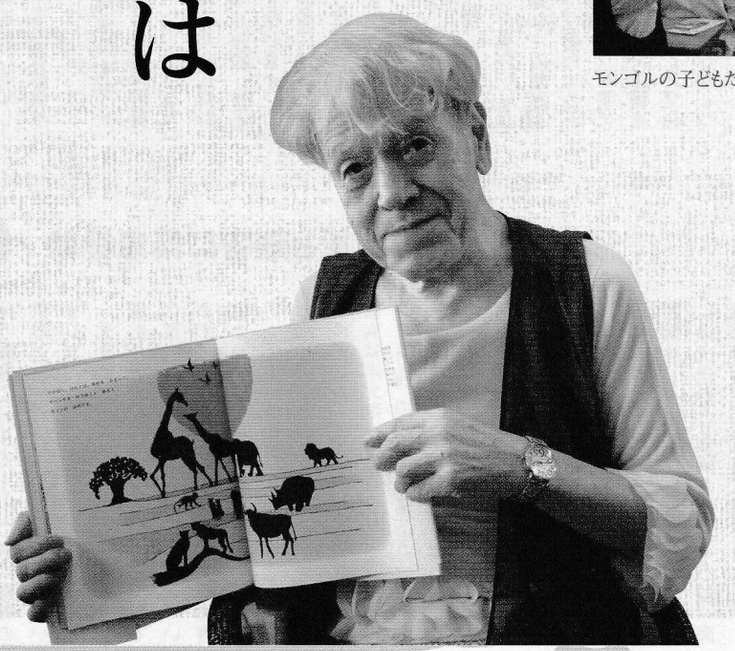
僕は日本側の発表者の1人だったのですが、研究者でもないのになぜ選ばれたのか不思議に思ったものです。しかし、小学校高学年のころ、源義経が大陸に渡りチンギス・ハーンになったという壮大な伝説に胸を躍らせ、以来、モンゴルとモンゴル民族に親しみを覚えていた僕にとって、初のモンゴル行きの話は渡りに舟でした。

絵本の読み聞かせから生まれる感動は異文化を結ぶ絆になる、といった趣旨の発表を行ったのですが、冒頭で、「僕の頭はレインボーカラーと言われていますが、この頭にモンゴルの大草原に架かる美しい虹を見せにやってきました」と、言ったところ爆笑が起こり、それまでの生真面目な雰囲気が一瞬にして和んだことは忘れられない思い出になりました。

そのシンポジウムを無事終えての翌日、僕は旧知のモンゴルの童話作家ダドシンドクさんらと共に、ウランバートル市内の住宅街にあるナラン小学校を訪れました。このときのモンゴル旅行はシンポジウムへの参加が目的でしたが、それだけではもったいない、モンゴルの子どもたちに読み聞かせを行いたいので、その機会を作ってほしい、と主催者に申



モンゴルの子どもたちは、優れた耳を持ち、言葉への感覚も鋭い



自ら作った絵本を子どもたちに読み聞かせる。子どもたちは大人よりも自由に国境を越えていく

し入れていました。それが急遽実現しての訪問でした。

モンゴルの小学校は9年制です。日本で言えば小中一貫教育ということになりますが、学校側はそのうちの3年生と4年生だけを集めていてくれました。なぜ3・4年生だけだったのかは、読み聞かせが終わってから悟ることができましたが、始まる前はせっかくだから全学年に聞いてもらいたかったのに、と思ったものでした。

ただ、この学校が日本語教育を行なっていることは聞いて知っていました。頭脳のトレーニングになるということで、碁もそろばんも教えているということでした。

さて、読み聞かせを始めるにあたって、通訳はどなたが務めるのかを日本語が巧みな先生に聞いてみました。すると、どうぞ、とにこやかに手を出しました。

「通訳はしません。そのままどうぞ」

えっ、と僕は小さく叫びました。

これから読み聞かせを行う自作の童話、「ちいさなちいさなぞうのひみつ」は、日本では主に小学校の中・高学年に読み聞かせています。今は日本の小学校でも英語教育を行なっていますが、仮に日本の小学3・4年生に「ちいさなちいさなぞうのひみつ」を英語で読み聞かせたら、たぶん理解できないだろう、とそのときの僕は思ったのです。

「よい子に読み聞かせ隊」の活動は、子どもたちの活字離れに対する危機感から始まった

ともかくも、モンゴルの子どもたちに日本語でやって理解できるだろうか、と半信半疑で読み聞かせを始めました。それからが、僕にとってカルチャーショックの連続でした。

場面場面で、子どもたちの表情が実に豊かに、動く、完璧に理解し、感情移入している、と読み聞かせながら舌を巻いたものです。

終わってから、なぜ3・4年生だけかの意味が痛いほど分かりました。その学年なら十分に理解でき、それ以上の学年には易しすぎる、と学校側が判断したに違いないのです。

モンゴル草原の遊牧の民は、視力で4や5は珍しくないだけでなく、聴力も至って優れています。風の音に気候の変化を予知し、遠くのせせらぎの音を聴き取って水場を察知できなければ、家畜を失いかねないからなのです。

日本の相撲部屋に入ったモンゴルの人たちは半年もあれば日常会話には全く不自由しなくなるほど、日本語を操るようになるそうです。耳のいいモンゴル民族の子どもたちに、日本の子どもたちは語学力では太刀打ちできないのではないか、と僕はホテルに戻る車内で痛切に思いました。

ただ、それは僕らの世代が、中学1年で習いだした英語が実用の役にはほとんど立たなかったことからくる偏見だったかもしれません。

この数年後、僕はウォーキングの最中に、欧米系の人に道を尋ねられました。僕は5歳のときから中耳炎の後遺症で軽度の難聴です。早口の英語で喋られて当惑していると、通り掛かりの小学5・6年生らしい男の子が助太刀に割って入ってくれたのです。しっかりした発音で道順を教え、欧米系の人もよく理解できたらしく大きくうなずいていました。

このとき、僕の脳裏に自作の童話の読み聞かせに聞き入ってくれたモンゴルの子どもたちの顔々が鮮やかに浮かび上がりました。日本の小学生が欧米人の絵本作家の英語による読み聞かせに、じっと聞き入る光景が見られるのも、ごく近い将来のことでしょう。

絵本の読み聞かせが広げる世界に国境はないのです。

＜Profile＞
しもだ・かげき
1940年、静岡県生まれ。76年、「やっとこ探偵」（小説現代新人賞）でデビュー。80年、「黄色い牙」で直木賞を受賞。執筆の傍ら、テレビにも多数出演。99年、「よい子に読み聞かせ隊」を結成し、保育施設や学校、福祉施設などを訪問。東日本大震災の被災地慰問も行っている。